

呂玉新

『政治体制・文明・民族（エスニシティ）の辨別
——徳川日本思想史』

呂玉新『政體・文明・族群之辯 徳川日本思想史』

著者の呂玉新氏は、在米の華人で、米国・ニューヨーク市に拠

点を置くカトリック系の私立・総合大学であるセント・ジョーンズ大学文理学院、並びにアジア研究所の客座教授を務めている。

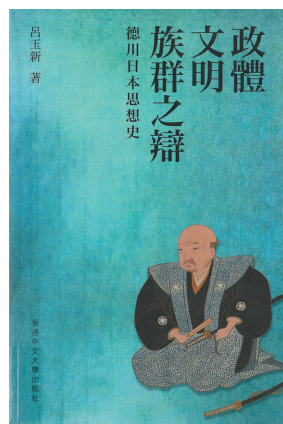
同大学のアジア研究の修士を経て、その後、同じく世界近代史講座の博士の学位を取得している。東アジアの政治思想史を中心として、広く文明的な立場から、英語・中国語・日本語により、

既に多くの論攷を公表しており、本書は、同じく香港中文大学出版社から、先年、上梓された『古代東亜政治環境中天皇與日本國的産生』（二〇〇六年）に次ぐ、本格的な専門書としては二冊目の単行著である。なお、氏には他にも、中国・日本・米国での豊富な教學経験を踏まえて、国語学・日本語学の飛田良文氏との共著『日本語・中国語意味対照辞典』（南雲堂）のような、言語学的な

伊東貴之

領域での論著も存している。

本書は、十七世紀初葉から十九世紀に至る江戸・徳川時代の日本の思想史を俎上に載せて、まずは、明朝の遺臣でもあった儒学者で、復明活動に挫折した後に日本に亡命し、水戸藩主・徳川光圀の庇護を受けて、後の水戸学の形成に対して多大な影響を与えた朱舜水（之璠）（一六〇〇〜八二）に始まり、その広義の影響や波紋の中で、儒学の日本化や土着化（本書の言葉に従えば、本土化）とも言うべき古学の勃興から、国学の擡頭を経て、後期水戸学へと至る思想潮流を述づけることを主眼とする。それと同時に、取り分け、後期水戸学の影響の拡がり以降、近代の黎明期において、狭隘な民族主義や極端な排外主義を生み出し、延いては、それがやがて近代日本の進路をそれ自体をも隘路に陥れることに結果した



香港中文大學出版社、2017年

所以を探ろうとするものである。

しかるに、著者自身の履歴からも、容易に予想される如く、本書では、こうした思想史上の流れに関して、それを単に「日本」という閉鎖系に落とし込んで叙述することを潔しとはしない。大航海時代に端を発する西洋列強の植民地主義から、いわゆる西学東漸、明清交替やそれを契機とした朱舜水に代表される東アジアの文化交流など、広く世界史的・文明的な広闊な視座から、この時期の東アジアや日本の思想文化が改めて照射される。

因みに、東アジア規模での朱舜水研究という観点からは、台湾の徐興慶氏の『朱舜水與東亞文化傳播的世界』（国立台湾大学出版中心・東亜文明研究叢書、二〇〇八年）などとも平仄を合わせるものであるが、新出史料の発掘など、実証的・文獻的な考証に強みを見せる徐興慶氏に比すれば、呂玉新氏の真骨頂は、むしろ広く文明史的な視座や文明論的な深い洞察に存していると評価することが出来る。もつとも、その前提としては、中国語・日本語・英語の夥しい文獻の博搜や渉獵が基礎となっており、四百頁余の本書のうち、本文部分は丁度、三百頁であるのに対して、その余は註解と膨大な引用文獻（及び数頁の索引）からなることから、著者が決して文獻の検証を怠らせていない点は、敢えて贅言するまでもない。就中、英語圏での当該分野の研究文獻に加えて、西欧の政治・社会思想史上の古典的な論著への数多くの参照など、

むしろ日本や東アジアの思想史を専門としない人文・社会科学系の他分野の研究者に対しても、開かれた姿勢が特筆に値する。

剩え、日本の近代における極端で狹隘な民族主義や国家主義、排外主義（本書の表現に従えば、本土主義）の遠因を探ろうとする姿勢や問題意識からは、まさに東アジアの伝統としての歴史を鑑として現代の訓戒しようとする、著者のいわば超学問的な動機さえも垣間見ることが出来る。それは、日本の現況や進路に対する警鐘や微言大義であることは勿論、場合によっては、大国主義的・覇権主義的な態度を強める中国も含めて、東アジア全体が、ある意味では前世紀的なナショナリズムに傾斜している状況に対する頂門の一針ともなり得ている。著者の学問が、狭い意味での歴史研究や思想研究に踟躕せず、同時に現代的・同時代的な問題関心を基調とする所以でもある。

さて、以下、大枠での本書の構成に沿って、個別の論点に関して、些かの論評を加えたい。また、本書の基調をなすモチーフは、一面で前著『古代東亜政治環境中天皇與日本國の產生』を継承するものでもあるため、必要に応じて、前著の内容紹介にも説き及ぶこととしたい。

まず「緒論」では、本書の問題意識や歴史的な背景などが叙述される。そして本書において主要な論述の対象となる水戸学や古学、国学などの政治思想が、軋轢や葛藤、反撥も含めて、大陸文

化や日本における朱子学の影響下に、単に日本思想史上のみならず、東アジア的な規模や視点からも、極めて示唆に富む展開を示していることが確認される。同時に、東アジア的な視座から、古代以来の日本史もまた回顧され、その際、しばしば西洋の政治思想上の成果も引証される。また、近現代に至る日本の民族主義に関する研究史も概観される。

因みに、前著以来の著者の重要な視点として、「虚君政治」という語彙があるが、これはかなり広義の概念の如く見受けられ、君主権を大きく制限する一方で、場合によっては、その権威も活用しつつ、実質的には、これと対抗する中間勢力（貴族や武士など）や民衆が、概ね政治的な実権を掌握する政治体制を幅広く指すものと考えられる。前著によれば、大和王権もまた、その初発の段階では、多くの氏族による連合体的な統治であったが、やがて七〜八世紀頃には、唐の律令体制を摂取して、中央集権的な体制を整えたものの、九〜十世紀に至ると天皇の権力は再び衰退して、まずは摂関家、次いで、武家政権による「虚君政治」が概ねその後の日本の政体を規定したとされる。著者は、こうした「虚君政治」的な在り方について、孔子が周の王室を推戴した態度に準えたり、自然法や社会契約説に依拠して成立した英国をはじめとする西欧の立憲君主制にも比擬している。中国語的な含意としては、清末に梁啓超らによって唱えられた「虚君共和」といった語彙や

観念とも反響し合うものと思われる。

次いで、本論に入ると、まず第一章では、天皇と徳川政権（幕府）との関係や水戸学の生成、天皇観をめぐる徳川政権（幕府）と初期の水戸学との相違について、縷説される。第二章では、まさに儒学の日本化や土着化と言うべき古学の興起が、第三章では、朱舜水と水戸学との関係や古学との影響関係について、それぞれ論究される。第四章では、契沖から復古神道への流れや本居宣長や平田篤胤らの国学思想を通じて、まさに「神国」や「神孫皇民」としての日本の特殊性や固有性、優越性を自認し、顕揚する思考回路が決定的になったと位置づけられる。最後に第五章では、藤田幽谷や会沢正志斎を中心として、後期水戸学の言説が紹介・分析されると同時に、国学や後期水戸学こそが、近代日本の極端な民族主義や国家主義、排外主義などの濫觴であることが改めて強調される。

著者の論述は、幅広い視点から、大筋では概ね穏当な論証に導かれてはいるが、その論断には、時に些かの違和感を覚える部分も、全く無しとはしない。まず、初期水戸学の立場が「尊王敬幕」であったことは間違いなく、それが後期水戸学に至って変質を遂げたとして、水戸学の生成と推移に時期的な区分を設けることは、最早、日本の学界での定論でもある（尾藤正英『日本の国家主義——「国体」思想の形成』、岩波書店、二〇一四年）。しかるに、徳川

政権（幕府）の立場や態度、また「官方」朱子学の主張が、一概に「尊幕抑王」であったと論定するのは、近年の研究成果に照らして、些か勇み足ではなからうか？（野村玄『日本近世国家の確立と天皇』、清文堂、二〇〇六年。また他にも、公武融和の権力構造から公武分離へと推移し、むしろ幕末の公武合体の運動は、逆に現実の公武分離過程での現象とする仮説もある。深谷克己『近世の国家・社会と天皇』、校倉書房、一九九一年）。

この点とも関連して、有名なケンペル（『日本誌』）の「日本には二人の皇帝が存在する。江戸にいる世俗権力の真の皇帝と京都の宗教的な皇帝と」との言葉を引証しつつ、こうした日本の在り方に対して、黄宗羲や顧炎武ら、明末清初期の専制君主制批判との符合を示唆するが、直接的な影響関係の究明は、些か困難かとも思われる。朱舜水の古学に対する影響についても、書簡の往来などに依拠して具に論証されるが、やや過大評価と思われる向きもあろう。

本来の儒教的な「華夷の辯」が、いわば「文明」の存否にもとづくもので、民族やエスニシティ（族群）に拠るものではないのに対して、古学から国学に至って、日本の特権性を言挙げする傾向が生じた点は、まさに肯綮に中るが、そこから後期水戸学、更には、近代以降の民族主義までは、なおかなりの径庭があろう。翻って、民族やエスニシティ（族群）に拠らない「文明」的な拡

がりを有した儒教思想が、江戸・徳川思想史の中で、様々な経緯から歪曲されたとの見方には、逆に中華中心主義的なニュアンスを感じ取り、反撥する向きもあるかも知れない。また、後期水戸学でも、藤田幽谷『正名論』の段階では、なお本質的には儒教的な枠内から、さして逸脱するものではないと解することも出来る。総じて、むしろ水戸学が広く伝播する過程での政治・社会的な情勢、その受容層についても、更なる考慮が必要かと思われるし、

近代以降の民族主義や国家主義の形成に際しては、ドイツ国法学や進化論などの西欧思想の影響や儒教の近代的な再解釈とその活用（悪用？）などの諸点をも、更に勘案すべきなのではあるまいか？（山村奨『近代日本と変容する陽明学』、法政大学出版局、二〇一九年）……。

最後に、本書の背景をなす問題意識との関係で附言すれば、後期水戸学に端を発する極端な民族主義や排外主義は、視点を変えれば、一面では思想の推移や展開の上で、やや典型的で例外的な事態でもあるように考えられ、無論、前述した如く、現代的・同時代的な観点からの著者の警醒の意図は紛れもないが、その背後にある微言大義を鑑みるに、近代の超国家主義や天皇中心主義とは、本来的に異質な「虚君政治」こそが、日本のあるべき「常態」であるとの認識が存しているように思われる。評者のこうした推論が正鵠を得ているとすれば、本書は、例えば「天皇不親

政」を日本の伝統と考えるような見方（石井良助『天皇——天皇の生成および不親政の伝統』、山川出版社、一九八二年。のち講談社学術文庫、二〇一一年）とも符節を合するもので、その意味では現在の象徴天皇制の在り方に照らしても、日本の穏健な保守派にも受け容れ易い見解のように思われる。また、著者の洋の東西に亘る、極めて幅の広い文明史的・文明論的な視座は、同時にすぐれて「国際日本研究」や「国際日本学」の一つの典型たり得ている。

なお、本書の書評としては、管見の限りでも、既にネット上のものでは、中国の王鍵氏（『中国社会科学網』、中国社会科学院・中国社会科学雑誌社、二〇一七年五月）、並びに、紙媒体としては、台湾の郭雨穎氏（『漢學研究』第三六卷・第二期、漢學研究中心、二〇一八年六月）の両氏によるものがあり、中国語圏において、相応の影響があったことが容易に見て取れる。